

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
 編集／光の子 編集委員会
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
 TEL／0480-72-3883
 振替／東京 3-128022
 印刷／社会福祉法人 共愛会

暑中お見舞い

申し上げます。

社会福祉法人 光の子どもの家



絵・中島 英子

病 氣

(ルカによる福音書 第五章二十節)

理事長 福島 勲

昨秋雑草を刈っていて、うかつにも右眼を粗朶の先でついでしまった。翌朝も磨硝子を通して物を見るようであったので、病院へ行った。受け付けは時間をとらず、すぐ眼科へ廻った。

だがここからが大変、医師の治療を受けるまで長い間待たねばならなかった。

小さな地方都市の病院であったが、私と同じ様な老人たちが待合室を塞いでいる。

昔は病院通いは費用が高くて大変だった。今は保険で賄われ負担が軽くなった。老人だけではない若い者たちも気軽に病院へ走る。

重盛が病に罹った。父清盛から、時に来日していた中国の名医を差向けると伝えてきた。

重盛は外国人などに診て貰っては日本の恥だと断ったが、やがて死んだとある(平家物語)。

こんな所に国粹主義を振り回す必要など毛頭ないことは言うまでもない。

彼は父清盛の乱行を諫めたが聞き入れられず、苦にして死さへ望んだものである。四十三歳の若さで死んでいる。

モンテーニュ(十六世紀フランスの思想家)は随想録の中で、自然界の運動はすべて有機的な過程の下に行われている。病気も自然界の中で有機的であり、生き物である。病気そのものの寿命があり、限界がある。

我慢して待てば過ぎ去ってしまう。人は病気に通り道を開けてやらねばならない。そしておけば病気も自分のうちに長くどまっていることはない。私は病気になる、ただ我慢して待つことよりほかに何もしたくないとまで言っている。(関根秀雄・モンテーニュ遺言)

このような説に全面的に賛成する人は少ないだろう。

晋の葛洪がすでにこのような強がり言う者を、ちよつと病気にかかる、鍼だ灸だと騒ぎ立てると嘲っている。(森

三樹三郎・莊子

ただ思うことは、最近の人々には我慢するということが欠けている、ということである。

とはいえ、我慢の出来るのも病気の種類にもよることだが、病は気からということもあり、病気に媚び、医者に甘えている一面があるように思える。

高ぶることのないために肉体に刺を与えられた(第一コリント十二・七)といった、神の恵みの賜物また神のみ旨を伺うといった謙虚さや深い意義の探求などは、病気から生まれてくる現代ではないようである。

イエスは、癒しを求めて友人たちに連れてこられた病人を癒されると共に、「あなたの罪は赦された」と宣言された。

病が直ちに罪であるということではない。罪のゆるしが病のいやしに秘められている。死すべき者が、生命に導かれたごとくであり、まさしく死からの甦りの象徴である。

苦しい病の床では死を思うだろう。生命の甦りに関わる医者は、死より甦りたもうた主・イエス・キリスト以外にはない。

福祉の人間観

施設長 今関 公雄

この七月で開設十年目を迎えます。当初幼児で入所した子どもが高校受験生となり、歳月の重みを実感しております。開設前後、一部の非行児が町の教育環境を悪化させるとの懸念の渦中で、入所児が地域社会の中で、より豊かに受容されることを願い、以来「福祉の人間観」を考え続けています。

確かに、外部から転入した二名の中学生により教育環境が悪化したと知らされています。全町のご努力で教育環境の回復にも至ったそうです。

穏やかな農村部に位置するこの町にとり、養護施設への入所児三十名の存在は当時、おそらく脅威の思いで受けとめられたと推察されます。

国際障害者年(一九八二)の概念と主な原則が次に示されています。「障害者などを閉め出す社会は弱くもろい社会であり、社会を障害者・老人などにとっ

て利用しやすくすることは、社会全体にとっても利益となるものである(健全者中心の社会は正常ではない)」「数多くの障害者を閉め出している社会は貧しく不毛な社会である。障害者を地域社会の他の人たちと違った要求をもつ特殊な集団として考えるべきではない。障害者は当たり前の人間的な要求を満たしたいと思うときに、特別な困難をもつ普通の市民なのである。」

ここでは真に健康な社会として、共存共助の福祉共同社会が構想されています。それは、「共に生き、共に歩み、共に育ち、共に老いる」社会とも言えます。一方、社会的弱者をより多く閉め出す社会は、硬直して一人ひとりがバラバラとなり、結果的に内部から自壊するとの判断があります。

さて、これらの考え方は、私どもの社会的養育にも問われる視点であります。集団が調和を保つとき、一部の人をスケープゴード(身代わりの山羊)とし

て排除する場合があります。いわば問題児として特別扱いをする方法であります。福祉の集団形成の視点から言えば、より多様な人々を包含・許容することが望まれます。光の子どもの家が、子どもの持つ難度に関わらず子どもを受け入れている理由は、この福祉の人間観を基準にしているといえます。

従って、開設当初の懸念は、実にこの福祉課題を示していると考えられます。その地域社会が、より多種多様な人々を包含・許容する地域社会に変容することが問われます。新たな地域住民となった光の子どもの家の中でもたちが、増し加えられる中で、もう一つ多様で豊かな地域社会に変容することが望まれます。このことは福祉が新しい価値への挑戦を意味しています。

地域社会と共に光の子どもの家もこの福祉課題への挑戦を続けることを開設記念日を前に新たに決意するものです。「それどころか、体の中で他よりも弱く見える部分がかえって必要なのです。」(聖書)

エッセイ

お宮参り

県立高校美術教諭 中島 睦雄

私は今、何枚かの写真を見ている。もう十数年も前のものだが、私の意識としては、そう遠くないもののように思える。しかし、写真の中の私の髪の毛は、まだ黒々としているから、時間は相当たつているのは、わかる。実は、自分の古い写真を眺めながら、センチメンタルな気分

に浸っているわけではなく、その中の別な種類の一枚のものを探していたのである。その一枚とは、メキシコに旅行した時、私が撮ったものである。これだけは、忘れられない印象の強いものだ。

メキシコシティに、ゲアダルルベ寺院という、石造りのゴシック様式の大教会がある。教会前の石畳の広場に、生まれて何カ月もたっていない赤ん坊を抱いた母親が、跪いている写真である。しかしこれは跪いているのではなく、膝をついて歩いているのである。石畳の上を、じか

に膝で歩いたら、それこそ大変なので、赤ん坊の父親らしい人が、母親の膝の下に毛布を敷いて、その上を歩かせ、その進み具合によって移動させている様であった。それでも、母親の膝からは血がにじみ出て、毛布を赤く染めていた。

膝の痛みをこらえながら、一歩一歩教会に向かってずり歩くその母親の表情は、それでも必ずしも苦渋に満ちているとは思えなかった。苦痛に耐えているのはもちろんだが、それよりも、何か思いつめたような、信ずるものに向かって進む強い意志を感じた。単なる観光旅行団の中の一人に過ぎない私には、その親子の行動の本当の意味が分からなかった。ガイドの説明では、

神から待望の子どもを授かった夫婦が、そのお札の意味で参拝しているのだ、という様な事らしかかった。気がついてみると、そういう親子だけでなく、たっ

た一人で、あるいはグループで、たくさんの人たちがづり歩いているのである。しかも、中には、教会の何キロも手前からそうして来る人もいるという。自分の体から血をしたたらせ、苦痛をこらえて進む人たちと、教会の中で一心に祈る人たちを、私は外国における珍しい光景としてぼんやり眺め、そして写真に撮りおさめておいた。

それにしてもこの光景は何だろう。信仰の深さなのだろうか、激しさなのだろうか。私は、この母親が自分の体を傷つけ、血を流しながら神に報告し祈る姿に、少なからずのショックを受けてしまった。

子どもが生まれた時、神佛にそれを報告し、子どもの健やかな成長を祈る儀式は、日本にもある。これは地域によって違いはあろうが、いわゆるお宮参りであって、男の子なら生後三十日目、女の子なら三十一日目などという仕来たりを持つ所もあるらしいが、いずれにしても、産まれた子どもの記念すべき日なので、正装をして出かけることとなる。メキシコでみた親子

は、特に親は普段着のままであった。このあたりにも、何か考え方の本質に違いがあるのである。

美しく正装をして宮参りする儀式を、私は非常に美しいと思う。子どもも美しいし、付き添う人の正装も美しい。これは、別に普段着だって心がこもっていればよいのかもしれないが、子どもの誕生に対する感謝の心や、それを喜ぶ華やいだ気持ち、将来の幸福を祈る心などが、日本での場合とちがも子どもの誕生にまつわる一つの儀式なのだが、このような大きな違いを私は感じた。

血を流す母親と、淡泊で美しい形を取る日本の場合と、単に習慣の違いというだけでなく、神と人間とのかかわり合いという部分での本質的な違いが、このように違った表現をさせているのかな、と思うのである。

学者もどきのつばやき(10)

『妻と五人と一匹の子どもたち』

山形大学医学部教授 仙道 富士郎

五人の男の子どもたちは皆家を離れ、今妻と十五歳を越えた猫と一緒に暮らしている。不妊手術をして帰ってきたレオ（雌猫なのに子どもたちにライオンを意味するこの名前をつけられた）が締めている包帯代わりの腹巻きをみてしつこくその理由を尋ねる子どもたちにごまかしの返事を妻と二人で繰り返し返したのが、ほんとに昨日のことのように思い出される。ドブに落ちていた生後間もない子猫を三男坊が拾ってきて、子ども部屋に何日隠していたのか、それともその日のうちに妻に見つかったのか、その辺のところは私にはもうはつきりしない。その時まで妻は猫が大嫌いであつたという。母親としての立場上捨てて来いとも言えず、あいまいに認める形になってしまったのだが、口を揃えて面倒をみるからと言った子どもたちは各人遊びに忙しくて、結局レオは六人目、

いや六匹目（？）の妻の子どもになってしまった。今更ながら思うのだが、どうも我家の諸事は総て妻の犠牲の上になり立って来たふしがある。多いことは好いことだと称して次々と子どもをつくつたのだが、私が育児に協力したこととしては長男を確か三回、次男を一回入浴させたくらいしか記憶にない。妻はひととき自我に目覚め「私の一生は何だったのか」と詰め寄つたが、「この濁つた世の中で子どもを育てることほどすばらしいことはないのでは」と、詭弁ではなく、本当にそう思ったのだ。妻はさらに抗弁して「そんなことを言っても、成長すれば母親は捨てられ、大事なことにについては父親に相談するようになるに決まっている」と嘆いた。これは杞憂だったようで、電話に私がでると多くの場合、第一声は「お母さんは？」

ない。偉そうにしているも親父は頼りにならないことを子どもたちはよく知っているようである。そして、お腹を痛めた故なのか、決まったようにいつでも五人の子どもたちをかばう。レオに対しては大きな声を出して叱つたりはしないので、むしろ私の方がかばう役かもしれない。と言うのも、レオは少し老碌してきたのか、妻の布団にお漏らしをするようになった。布団から臭いを消し去るのが大変らしく、二日も続けられたりすると、本気が怒っているわけではないようだが、妻は猫の鼻を布団にこすりつけて懲らしめたこともあつた。「もうあまり長くないのだから」と、私はなだめた。年とつた生き物とつきあうのは本当につらい。二十歳の猫の話は聞いたことがあるが、それにしても我が家の老嬢の余命が幾ばくもないことははつきりしているわけで、我が子が五年ももたないと宣言されたのと大した差も感じられず、その短い命を思うとふと涙を催すのは老化の表れであろうか。

五人の子どもたちは鑑賞物としては興味の尽きることがない。同じ親から生まれ出たとはとても考えられないほどに、もののが考え方、行動パターンに多様性が認められる。よく観察すると、それは連続性の変数のようではあるが、両端の距離はずいぶんと遠い。はつきりとしたものではないが、その中には分派があるようで、分派の長の言うことには親の話よりも素直に従つたりすることもある。高校でドロップアウトした末っ子が、ようやく卒業し東京の英会話の学校に通学していた。と親は思っていた。ところが、学校にはほとんど出席していないことが判明し、親はうろたえた。何をしたいのか聞き出したところ、渡米して勉強したいという。私は即座に反対した。こんな状態で渡米などしたら、むくろになって帰ってくるのがおちだと思つたからだ。次男坊が強く末っ子のアメリカ行きを支持した。もう三年を過ぎたが末っ子は日本にいたときには考えられないほどに真面目にやつていようだ。（もつともまだまだまされていられるのかもしれないが）。何とも情けない夫であり、父親ではあると思うことしきりである。

養護メモ 50

家族

その四 『情緒3』

菅原 哲男

養護施設に関わつて四半世紀以上にもなつてしまつた。

その前に東京の婦人保護施設で、想像を超える苦労の上、全く報われない人生を、身も心も投げ売つて生きてきた多くの婦人たちと関わつた。

そこでは当時の整備されていない、かろうじて生を維持する程度の制度のなかで、多くの人々の善意とプロテスタントの若い女性キリスト教徒の献身者、デアコニッセと呼ばれる人たちと、制度の欠けや不足を補いながら生活指導と、白洋舎の技術指導を受けながら、借金をして機械を導入し、その頃はしりのおむつのリースなど社会復帰のための職業訓練などを中心に、この国の水準をはるかに超えた倫理観や価値観を生成して生活していた。しかし、はかばかしい社会復帰は実現していなかつた。

特にその人たちの中には、能力や若さも含めて力はあるが、いわゆる社会へなかなか出てい

けない人たちの一群がいた。不思議なほどに、ほとんど一般の生活ができかかつているのに、すんでの所で無断外出し新宿で一週間ほどを過ごし、どろどろに汚れて、大概が警察を経て、性病の検査など晴れがましくない手続きもして帰ってきた。

そんなことを繰り返して、とうとう、そのグループ以外の真面目な若い子を連れて新宿に走つたことをとがめられ、それを苦にした柴田さんという二十代半ばの婦人が鉄道に身を投げて命を絶つた。それは、些かではない関わりをしていて同じ世代の後半を生きていた者としては耐え難い衝撃だつた。

それがきっかけで、調書を調べてみた。何と、殆どそのグループにくくられる人たちは、施設、それも少なくない割合で養護施設出身だったのである。

葬式で出会つた兄を山梨県に訪ね、柴田さんの生い立ちとその周辺を確認した。

生まれて間もなく両親は離婚、乳児院から養護施設を経て中学を卒業したが、中学頃から非社会的な言動が多く、友人もほとんどなかつた。就職した先を飛び出して喫茶店からバーなどを転々とし、婦人保護施設入所となつたものであり、彼女の生涯の大半が施設でつた。

この数年、その頃の何も分らないで、ただ夢中で関わつた多くの婦人たちのことが思い出され心にかかつていた。何人かの精神医、心理療法家などの専門家に、その頃の婦人たちのやりとりや、乱暴でつたない関わりなどを赤面しながら語りかけ、やつとあと一息のところまで来たのに、なぜ彼女たちは新宿に走り自らを汚し、社会への道を遠ざけることを繰り返して

いたのだろうかという疑問を、当時の書きなぐつた古ぼけたメモなどを引っぱり出し、怠惰、マイナスへの連帯意識、意欲喪失、ひがみ、諦め、失望などの考えられることばを駆使して問いかけながら考えてきた。

彼女たちは、本当に大切なことを大切に思えず、時には喜怒哀楽

哀楽さえ共有できなかったのである。寂しい時に寂しいという自分を当たり前に表示しないか、出来ず、「私のことなんか誰にも分からないのよ。」「ほつといてよ。」「関係ないでしょ」「どうせ」などのネガティブな言語をいつもまもつていた。

そしてもう一つ、彼女たちに決定的に思えるのは「普通」の親子関係や「暮らし」の経験を全くと言つていいほど持つていなかったことである。その出生は言うまでもなく胎児の時から歓迎されず、これまでの人との関係に「愛」がないか、あつても相当貧しく、生まれ、這つても、立ち歩くようになっても誰からも誉められも喜ばれもしなかつたであろうことが想像される。

人の行動を決定しその関わりで決定的な役割を果たすのは情緒である。知的な働きはその比にさえない。情緒を共有するすべを知らなければ公私を含めて生活は成立しない。

来春ここを出ていく子どもたちが、どれほど人との情緒を共有して関わりをつくつてゆけるのか、思うことしきりである。

原田家日記

竹花 信恵

四月三十日。春の収穫を手にした帰宅が続く福子。つくし、クロイバの花輪、ティッシュに包んだ花束。時には帰宅の遅さを叱られながらも、持ってくる度に、両手いっぱい「のびる」も大きくなっていた。泥まみれの「のびる」を水でよく洗い、忙しいときは、ため息まじりに、一つひとつ皮を剥く。夕食の一品として加わる。辛いからいいながらも、味噌をつけてポリポリ食べて、いっおお皿は空になる。

五月八日。母の日。ただひとり、そのことを覚え表現したのは高三の悟。母ではない私が彼の実母と似ているのは年齢だけであるが、無造作にカーネーションの花を手渡してくれた。

たくさんついたつぼみが開かないうちに、悟のことで眠れぬ二夜が続いた。「心配かけてごめんさい」といわれる記憶がまた重なっていく。

一年後、悟はどこで何をしているだろう。自分で歩き始める日が近づいている。心配し、応援することの他、何もできそうもない。

五月十八日。小学校卒業記念に、「ピククリグミ」と「白もくれん」の苗木を買った。何を忘れ、何をしなくても、毎日、水をやり、大切にしている。葉の一枚におもちの鉄砲玉を当てられたと、涙をこらえて言いに来た。隣りの木が大きすぎて日当たりも気になるようだ。それにもかかわらず、いちにち一日まぶしい緑の木に育っていく。今朝も、真っ先にジョロ口片手に外へ行く。

自分の木の、隣りの木にも水をやり始めたときに、潔の心も、もう一回り大きくなっていくだろう。

五月二十二日。保母の実家から新茶をもらう。お茶を入れることに気がつくようになった高二の晃子が、新茶の入れ方を聞きながらいられてくれた。「新茶って、やっぱりおいしいね。」

香りと、みずやかな色と、季節をとにも味わう。

光の中で

佐藤家

十回目の年度始めに職員の人事によって、新しく分園型自立援助事業を展開することで、子どもの担当替えや、家の引っ越しがありました。私も担当の子どもを少し入れ替えなければならぬ上に、その子どもたちを引き連れて、元の佐藤家へ引っ越ししました。年度の前後は少々不安でした。子どもたちは明るく元気にふるまっています。きっとあったらう不安を少しも感じさせませんでした。そんな家のまとまりを願って、近くの公園にお出かけすることにしました。

知人友人はもとより、見も知らない多くの方々の善意がなければどうやっていけない光の子どもの家ですから、私たちもお手伝いをして、そのお駄賃としてこの計画をすることにしました。

伸び放題の裏庭の草取りをみんなで一時間する事にしました。なかなか手に負えない頑固な草を中二の鷹文は、たくましい腕でバリバリ抜いていきます。小さな環にも草の取り方を上手に教えてくれました。たっぷり汗をかいて、裏庭はきれいになりました。

さあ出発です。私の運転で久喜の菖蒲公園に出かけましたが、途中で道を見失って三倍もかけてやっと公園に着きました。それも、鷹文や六年生の擢也が、車から走り出て道行く人に「すみません。」と、問いかけて、尋ねてくれたのです。

きれいに整備された広い公園を子どもたちは走り回り歓声を上げて、まるで水を得た魚のように泳ぎまわります。そこでも、小さな子を仲間に入れる工夫をしてくれる子どもたちのおかげで、ほんのちよっぴりほっとして心から、よかったなと思いました。

お弁当を食べ、暗くなるまで遊んで帰る車の中で、大きくなった子どもたちにしてもらうだけの一日を思い返し、これからは、お互いに対等な人格として、本当の意味で愛し合えるような、もう一つ違う関係を創らなければと、思いを新たにしました。石毛 照子

子どもたちの季節

仙道家

神さま、いつも守ってくださいありがとうございます。
新しい場面や人間関係などが苦手な仲間ともつきあうことが下手な六年生の源将司と、この頃聖書を読んでお祈りをする事が出来るようになり、毎日続いています。

将司は、絵を描くのが好きでとても上手です。人や静物など細かく丁寧に描き生きているように描きます。学校の絵画コンクールではいつも金賞をもらっている期待の星です。父と母がどこにいるのか分からない将司は、グループの中では長男の役割をしっかりと果たしてくれまます。つい先日担当の保母が五日連続の休暇の間、起床から朝の本読み、食事のマナーや就寝までしっかりと担当者に代わって小さな子の多いグループの面倒を見てくれました。大人たちも本心に助かりました。しかし、人と仲良くしたいと誰よりも思っているのですが、私の関わりが、私に任せられて、たくさん仲間との関係で将司に辛い思いをさせてしまいました。

ここにいる子どもたちが、いつも抱えていて、誰にも表現できない心の叫びを敏感に察知できない自分を情けなく思います。

そんな私がそんな将司と祈るようになったのはきつとあなたのお計らいなのでしょう。いつもは頑固な将司が、思いあまつた私の「聖書を読んでお祈りしようか」という誘いに、「うん、やる、やる」とうれしそうに答えてくれる。まるで待っててもいたかのように。

きつと将司の心があなたを求めているのでしよう。神様、将司やここで生活している子どもたちの心の傷をともに痛み、重荷を担う助け手と私になることが出来ますように。

子どもたちの心を愛でみてくださいますように。

光の子どもの家にかかわる総ての人々にあなたの祝福が豊かにありますように。アーメン。 穴水 祐介

NIJI

バザーのご報告と感謝

ジンジンと滲みわたる不況の風は、最も弱い部分に襲いかかり、容赦なく打ちつけています。そんな一つである光の子どもの家の生活の質を維持していきたいという光の子どもの家の願いを共有しながら、みなさんに呼びかけ、ご協力を呼びかけましたところ、短期間に遠く長野県や北海道、神奈川県、東京都などに住む人々からのご協力が寄せられて、職員ともども感動いたしました。

準備期間が短い上に勝手を知らなかったり、当日は、町内に福祉関係などの催しもあったり多くはなないお客さんでしたが手伝いに来ておまけにお客になって下さる人も多く、最初にしては上々の出来でした。

反省会では、光の子どもの家の子どもの負担をかけるという意味で、子どもが通っている義務教育の校区に住む人々からの金品の応援を求めないという精神を理解しながら、来年の実施を確認し、準備を早速始めようということになりました。引き続きのご協力をお願いいたします。

売り上げ純益は、協力金も合わせて『五十二万余円』でした。総額を光の子どもの家の経常経費にご寄付いたしました。

ご協力を心から感謝申し上げます。

連絡先 埼玉県北埼玉郡大利根町砂原二七七
光の子どもの家 気付

〇四八〇一七二一三八八三 FAX〇四八〇一七二一六六四九
光の子どもの家の職員確保バザー実行委員会

ヴォランティアグループ『しずくの会』
俳句結社『浮野』

探光
天使になれなくて……(最終回)
 名古屋大学付属病院 江崎 みちる

感情の高ぶりに任せて振り挙げた私の右手が、ピシッという音と共にマツ君の左の頬をとらえた。その瞬間、私ははっと我に返った。マツ君の右手がすかさず私の頬に飛んできたのも、それと殆ど同時であった。

「痛えなあ。何すんだよ！」マツ君の、これほどの怒りに満ちた力強い視線に出会ったのは、初めてのことだった。少し気押されながらも、私も負けずに彼を睨みつけていた。彼が心底、憎らしかった。

「私のこと舐めてるの！」

「舐めとるのはそっちだろが！」

ホールの窓際でゆったりと春日だまりを楽しんでいた数名の患者たちは、信じ難いこの白熱した光景に固唾を飲んでいるようだった。

私とマツ君はしばらく睨み合っていたが、やがて彼は捨て台詞を吐いて、ぶいと踵を返して自室へ入っていった。

ホールに残された私は、数名の患者に見守られる中、怒りのやり場をふいに失って狼狽した。患者に手を挙げてしまった——予測もしていなかった自らの行動に、愕然とする他はなかった。右手にマツ君のほの暖かい頬の感触を張り付けたまま、私は詰所に退散するしかなかった。

(マツ君が悪いのよ。そう、私は彼のためを思って手を挙げたのよ) そう自分に言い訳をしながら、私の頬を涙が伝わった。白衣で泣いたのは、これが初めてのことだった。自分がひどく情けなかった。

詰所では、数名の医師と看護婦が、私の硬ばった泣き顔を見て驚いて声をかけてきた。

「マツ君の顔、ひっぱたいちゃった。……。」

一瞬、その場の空気が張りつめたが、年輩の看護婦が慰めるような口調で言った。

「彼はこの頃、目に余るものね。分裂病の慢性移行期だから、今が大切なのよ。社会の中で上手

現場から
幸せであるように I
 白石 輝雄

天候の定まらない今日この頃ですが、いかがお過ごしのことでしょうか。おかげさまで光の子どもの家、家族全員が健康で、何事もなく新しい年度を迎えることが出来ましたことを心から感謝します。

私にとってここでの二度目の季節となりました。真新しいスーツに身を包み、のどかな見渡すかぎりの田園風景に、就職の面接に訪ねることも忘れ、何も考えずしばらく眺めていました。その時出会った子どもたち、また「おまえ、来いよ」と力強い菅原先生の言葉が、決断づけたことは言うまでもありません。

年度の変わり目には、昨年の私のように出会いを喜び、またその逆の別れの寂しさが行き交います。

ここも例外ではなく、六年間もの間、子どもたちを守り支え、共に生活を創ってきた、やさしくて話好きで笑顔のすてきな竹下保母と、四年間、子どもたち

と一緒に、お菓子を作ったり、家やその周辺に花や緑を絶やさず、子どもたちの情緒を養い、心を育んできた五来保母の二人が、職員や子どもたちにたくさんたくさん感謝されて別れていきました。そして彼女たちは、職員としてではない、普通の人間としての大切な関わりを継続するよう努力を始めています。

新しく職員に黒田俊雄、神田幸枝を加え、町内にアパートを借りて始めた自立援助のための「旗井の家」などによって若干の職員や子どもの移動があり、私も神田、竹花保母と一緒に原田家の住人になりました。

そうして始まったこの年度も二名の退職で失った経験と子どもたちの激しい成長は、いさお私たち指導員の力を質量ともに強く要求してきます。

ある暑い日の午後、いつも快活でにぎやかな中学二年の鷹文が一人だけ学校から早く帰されてきました。理由は三年生の地

域の子に狙われていて危険だというものでした。

学校の生活指導の教師が鷹文とその子の家を訪問して夜中までかかって仲直りをさせて一件落着いたようでした。

それから間もないある夜、高三の悟と匠、高二の陸男の姿が見えませんが、という報告が保母から相次ぎました。

調べていくと、この春中学を卒業して就職した先を早くも辞めて仕事が出来なくて困っていたのを、調理師の中村さんが、近くの左官屋さんに紹介して働き始めた地域の杉山君と一緒に出ていったという。

またか！、と思いながら、菅原に報告と指示を受けるために電話をしたが、さほど驚きもしないで「待つしかない。帰った何をしていたのか聞いて寝かせろ」と、夜遅いこともあってか、素気なく言われました。

それでも気にかかり、どこへ行ったものか当てられない彼らを捜しに車を走らせながら、次々に起きてくる子どもたちの事件に少々うんざりもしていました。

眠さにイライラも頂点に達し

く人と関わることを学びとる時期だから。厳しさも愛情の一つじゃない。「確かにマツ君の悪戯は、日に日にエスカレートするばかりだった。この日は、隣の部屋に無断で入り込み、床頭台の菓子に手を出した上、止めようとした他患者と揉み合いになり手に引っ掻き傷を負わせたのだった。十八歳になる彼が、病気のために崩壊してしまった人格を再形成し、社会復帰をめざす以上、善悪の判断や他者の傷みを察する事、罪を認め謝罪する事は、最低限身につけなければならぬルールである。しかし、いや、そうではないのだ。愛情なんかではなかった。

「違うの、ムシヤクシヤしてただけよ。白衣着る資格なんてないのよ。」

誰もが返す言葉を失ったとき、その時、詰所の窓口で私を呼ぶ声が出た。振り返ると、鉄格子の間からマツ君が身を屈めて、私を真っ直ぐに見詰めていた。

「さっきはごめんさい。」小さな声だった。そして少し照れ臭そうだった。それは、マツ君の発病後初めての自発的な謝罪

翌日病棟に行くと、マツ君は懲りもせずいたずらを繰り返しては叱られていた。あの一件の目撃患者からは、「江崎さん、ド迫力あるで、怒らせんようにせな。」と茶化される有り様だ。もう二度と患者に手は挙げるまい。そして、もう二度と天使の仮面も被るまい。私は私なのだ。そう思ったとき、白衣の背中が、すうっと軽くなつてゆくのを私は確かに感じたのだった。

た午前一時頃、悟を先頭に悪びれもせず帰ってきました。

「今頃まで連絡もなしに何をしていたんだ！」怒気を含んで言い放ちました。

いつになく悟は真っ直ぐに私を見つめて

「僕たちは杉山君と一緒に野中君のところに行つて来たんだ。」

野中というのは鷹文をつけ狙った地域の中三の子の家です。その子の名は雄輔といい、先頃先生が子どもどうしのことに入ったのは鷹文が言いつけたからだ、と逆恨みしているという話を雄輔君と友達だった杉山君から聞いて行つて来たという。

外で子どもたちで話をしていたら、夜遅いから中に入れと野中君の父母に言われ、中に入って野中君の父母を加えて話を続け、雄輔君はもうろん杉山君も言葉遣いの悪かった陸男も野中君の父に殴られたりしながら、鷹文が安心して学校に行けるように、きちんと決着をつけてきたというのです。

もう大丈夫だよ、という三人の顔は晴れやかでした。

うかうかしてはおれません。

「うん、痛かった。」彼もにやつと微笑んだ。

彼と殴り合ったとき、私は自分が看護婦であることをすっかり忘れていた。天使の仮面を剥ぎ取られた生の私が生のマツ君とぶつかり合ったのだ。確かに看護婦失格であろう。しかし、それならば、看護とはいったい何なのだろうか。白衣の天使とは——。

「私の方こそ、ごめんね。でも、今、とっても嬉しいよ。痛かった？」

「うん、痛かった。」彼もにやつと微笑んだ。

彼と殴り合ったとき、私は自分が看護婦であることをすっかり忘れていた。天使の仮面を剥ぎ取られた生の私が生のマツ君とぶつかり合ったのだ。確かに看護婦失格であろう。しかし、それならば、看護とはいったい何なのだろうか。白衣の天使とは——。

日誌抄

三月四日、
四月末日まで

三月四日 県立高校入学試験合格発表。栗橋高校を受験した一名が合格。元職員や学習指導のヴォランティアの人たち、学校の先生、家族や教会関係の人々が駆けつけて合格祝いのパーティー。

十一日 もう三年になる家庭引き取りとなった佐藤姉妹の継母より「父とはもうやっではない」と相談あり。十二日に来訪して、別居することでもう少し様子を見るよう提案。

二二日父来訪しこの提案を受け入れる。二七日訪問して調整し四月より父が近くに家を借りて生活についての責任を持つことで合意。一日も早い回復を願う。

二十日 ひまわりの会コンサートへ子どもたちは鎌田おばちゃんに招かれて。

二四日 町内の岡村正昭氏より自転車のご寄贈。感謝。

二六日 第三八回理事会。事業計画・予算案を審議。

二八日 今年度もがんばった会

この一年の成長を感謝し更なる目標へ向かう。

○江森ヘヤーサロンの整髪ご奉仕。ありがとうございます。

三〇日 東京電力の社内ヴォランティア団体「はむこ会」のご招待で電力館や水族館などを東京に見学。行き届いたおもてなしに付き添いの職員ともども感動。ありがとうございます。

三一日 竹下由香、五来淑子両保母退職。最も美しい青春の時の働きに心から感謝して。

四月一日 十年度目を厳肅に迎える。次の十年度を見通して。分園型自立援助事業「旗井の家」開始。岩崎保母担当。黒田俊雄指導員、神田幸枝保母就任。

十二日 一九九三年度予算の収入の三百万円の欠損への対応として、職員確保のためのバザーを計画。バザー委員会を構成し、子どもたちの負担にならないように細心の配慮として、義務教育の校区からの金品の寄付要請はしない。地元後援会にはそのことをよく説明し理解を得る努力をする、加須市のヴォランティア団体

「しずくの会」俳句結社「浮野」の共催などを確認。

五日 今年度もがんばろう会。新学年、新入学のお祝いと新任職員歓迎会。にぎやかにそして力強い意気に溢れて。

○吉田孝子氏より「子ども世界」のご寄贈。感謝。

六日 田中博正先生よりたくさんのお菓子と高校の合格祝が送られてくる。心から感謝。

八日 小、中、高校入学式。小学生十七名、中学生八名、高校生五名となる。

十四日 赤十字奉仕団、後援会共催の草取りご奉仕。感謝。

十九日 「しずくの会」栗原一子氏他よりお米、ケーキを。

二二日 後援会役員会。

二五日 バザー委員会。五月二二日午前十一時三〇分と決定。広報宣伝、出品の場所や値付け、テントの手配など具体的に動き出す。後援会の理解を得る努力を継続。(くら)

○一九九五年度のバザーへのご協力をお願いします。寄付物資などは光の子どもの家気付で。

反射光

☆五月二二日に発効した子ども

の権利条約は、様々な思いで受けとめられているようです。文部省の反応は大方の批判を受けているようですが、養護施設などの子どもたちの生活を丸ごと抱えてしている関わりにも大きな影響をもたらすものでしょう☆そもそも権利という考え方が日本人にとつてどれほどに受け入れられているのだろうか☆光の子どもの家の廻りはすっかり青田に囲まれています☆が八八回もの手作業の米農業は、始末の出来たところから村中で手伝ってみんなが終わるまで続き、田植えなどが終われば早苗養いを催してふるまって終わった☆この手伝い合いには権利とか義務というぎしぎしした関係はなかったように思う☆この国の人々は情緒を基本にして関わり合ってきたのではないかとこの頃思っています☆四角張った権利意識の固まりではなく、まともに形成されることがなかった情緒をしなやかに養い社会に出ていく日の備えの万全を願いつつ励みます。(哲)